

医心 伝心

ごめんなさい。 イクメンではありません。

県医理事 長田 拓哉

今年には自分にとって大きな変革の年となった。富山県医師会の理事として、富山の医療を守るお仕事の手伝いをさせていただいている。

その中で、自分が最も不相応だと思ったのが何を隠そう「男女共同参画」だった。この問題に関して村上副会長や種部常任理事の鼻息は荒く、他の理事先生たちもタジタジだ。もともと富山大学には女医が多く、また将来女医となるべき女子学生も多く在学しているから、男女共同参画事業の拠点となりやすい。そこにいる医師会理事がたまたま自分だったので、手伝いをするように言い渡された。今年には勉強の年であり、どんな指示にも誠意を持って答えていこう、と心に決めていたので2つ返事で仕事を手伝わせていただく事とした。

しかし男女共同参画は自分にとって？が多すぎる仕事である。そもそも男女共同参画とは女性が考える問題(?)であって、男の自分に何ができるのか。会合の時に机や椅子を運んだり、紙を配ったりする仕事か。実際に蓋をあけてみると、自分の仕事は講演会に向けての参加者集めだったので、これは予想とあまり変わりがなかった。元々人を集めるお祭りは好きな方だが、講師の種部先生は大学時代、軽音楽部の先輩でもあり気合いが入る。男でも女でもかまわない。とにかく講義室をいっぱいにする。先生に来ていただいた男女共同参画に関する講義では115人いる大学4年生のうち、実に103人が出席してくれた。こんなに学生が集まるのは自分たちの進級がかかった期末試験ぐらいだろう。自分でも本当に驚いた。しかしもっと驚いたのは男子学生たちの柔軟性であった。アンケー

トの結果から、子供が生まれたら自分の仕事にゆとりを持って妻と一緒に子育てをしたい、と答えた男子学生が半分近くもいて、男子学生たちの素顔は男女共同参画、あるいはワークライフバランスをずっと身近な問題としてとらえているようだ（もちろん未だに女性は結婚したら仕事をやめて家庭に入ってほしい、と答える男子もいたりして、それはそれで面白い）。そうか、自分ももう少し頭を柔らかくして男女共同参画の事を考えてみるか。そんな事をぼんやり考えていた矢先、県の医師会会館で公的病院におけるメンター懇談会が開かれる通知が来た。今回は自分だけでなく、妻にも参加の通知が来たらしい。「よし、今こそ実践の時だ。」自分は村上先生にメールを出した。「今回は妻が出席します。僕は医者になって初めてイクメンになりますので出席できません。」懇談会の日には子供の送り迎えや皿洗いをして妻の帰りを待った。しかし帰ってきた妻はなぜかしら機嫌が悪い。「村上先生はあなたのことをすばらしいイクメンとかいってえらく褒めてたよ。普段なんにもしないくせにこんなときだけ格好つけて！泉先生はちゃんと、自分はこれまで家のしごとなんか手伝った事がない、って言ってたよ。」全く返す言葉もない。今年の台風並みの大荒れ状態だ。このようなときには無理に言葉を返そうとはせず、台風が通り過ぎるのをひたすら待つのみだ。

男女共同参画も決して楽な道ではない。だが時代の波に乗り遅れ、家族からもぼつんと取り残された寂しいオヤジにならないよう、少しずつでも努力は続けていきたいと思う今日この頃である。